

新しい人生の扉を開くのは

中野 理恵

母子家庭は、経済的困窮を抱えることが多い。本作の主人公、40歳になるシングルマザーのバニー・キングには、ふたりの子どもと一緒に暮らせない事情があり、経済的にはギリギリの日々を過ごしている。そうなった原因には予想もできない出来事があった…。

バニーが暮らすのは南半球ニュージーランド最大の都市オークランド。彼女は信号待ちのために停車する車のフロントガラスを拭き、僅かな収入を得ていた。〈フロントガラス拭き〉と言っても、止まっている車に勝手に駆け寄り、フロントガラスをせっせと拭き、チップなかわからないが、手を差し出してオカネを頂くのだ。ふたりの子ども、10代の息子のルーベント、やっとカタコトながらお喋りをするようになったばかりの幼い娘のシャノン。ふたりは彼女の起こしたある事件により、それぞれ別々の里親に育てられていた。

バニーは、シャノンの誕生日までには新居に越し、彼女の誕生日パーティを開きたい、いつか家族3人で暮らしたい、との夢を抱いていた。というのも、バニーがシャノンに会えるのは、家庭支援局で行われる監視付きの面会交流の機会だけだったのである。シャノンは、バニーの姿を見ると、すぐに「ママ!」と甘えてくる。ルーベントは滅多に会えないので、里親の家の庭で遊ぶその姿を、時折、こっそり覗き見るのだったのだが、バニーを見ても、ルーベンは〈扱い〉の難しい年齢。母親への思いは深いのだろうが、迷惑そうな表情で、対応は冷ややかだ。ひとりで暮らすバニーは、ある日同じ仕事をしているアポリジニの男性セム宅の食事に招待された。英語を使わない彼らの話す内容を理解できないながらも、素朴で大家族の暖かさに触れて心 and むのだった。



©2020 Bunny Productions Ltd

そんなある日、妹のグレースと再婚相手のビーバンが暮らす家のガレージを貸してもらえることになったのだが、ビーバンが義娘のトーニャに言い寄る姿を見たバニーは、かっとなり、ビーバンに手を出してしまった。結局、バニーは引っ越しのために貯めてきたオカネを取り上げられ、ガレージも追い出されてしまう。万策尽きたバニーは、何もかも無視して〈子ども奪還作戦〉を開始する。服装で印象が変わる、と助言された通りに都会のワーキング・ウーマン風のスーツを新調し、他人の部屋を自宅だとウソをつき、ソーシャルワーカーの面接をクリア。ビーバンの車を盗み出してトーニャを救い出すと、ふたりで一路、シャノンとルーベントの面会を求めて家庭支援局に向かうのだった。

呆れるほど直情的なバニーに「あっ、ヤバイよ!」と思いながらも、最後まで見てしまった。もし、バニーの置かれた環境が男性だったならば、どう描かれたのだろうか。そして、人類が宇宙に行く時代になっても、多くのシングルマザーが、厳しい人生を歩まされているのは世界中同じではないか。僅かでも現実が変わって欲しいと願うばかりだ。

《Cinema Information》

『ドライビング・バニー』

ニュージーランド映画(100分) / 監督: ゲイソン・サヴァット / 9月30日(金)よりヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。